

「清須会議」★★★★★

2013（平成25）年8月27日鑑賞＜東宝試写室＞

脚本・監督：三谷幸喜
 原作：三谷幸喜『清須会議』（幻冬舎刊）
 【清須会議出席者】
 柴田勝家（織田四天王の一人、筆頭家老）／役所広司
 羽柴秀吉（織田四天王の一人、後の豊臣秀吉）／大泉洋
 丹羽長秀（織田四天王の一人）／小日向文世
 池田恒興（信長の重臣）／佐藤浩市
 【織田家】
 お市の方（信長の妹）／鈴木京香
 織田信雄（信長の次男）／妻夫木聡
 織田三十郎信包（信長の弟）／伊勢谷友介
 織田信孝（信長の三男）／坂東巳之助
 松姫（信長の長男・信忠の妻）／剛力彩芽
 織田信長（本能寺の変によって死去）／篠井英介
 織田信忠（信長の長男）／中村勘九郎
 【織田家家臣】
 前田利家（勝家の副官、秀吉の親友）／浅野忠信
 黒田官兵衛（秀吉の軍師）／寺島進
 滝川一益（織田四天王の一人）／阿南健治
 堀秀政（秀吉の家臣）／松山ケンイチ
 前田玄以（織田家家臣）／でんでん
 佐々成政（信長の家臣）／市川しんぺー
 明智光秀／浅野和之
 森蘭丸（信長の家臣）／染谷将太
 小袖（お市の方の侍女）／瀬戸カトリーヌ
 義兵衛（清須城門番）／近藤芳正
 【秀吉一族】
 寧（秀吉の妻）／中谷美紀
 なか（秀吉の母）／戸田恵子
 小一郎（秀吉の弟）／梶原善
 【その他】
 枝毛（忍びの者）／天海祐希
 更科六兵衛（北条家家臣）／西田敏行

2013年・日本映画・138分

配給／東宝

＜最新の三谷映画も星5つ。これでオール5！＞

『12人の優しい日本人』（91年）を観た時は、「これが三谷幸喜の映画！」という実感は全くなかったが、とにかくその面白さに感心。当初は、アメリカの陪審映画の最高傑作である『十二人の怒れる男』（54年）のパロディ版だろうと思っていたが、何の何の！その出来の素晴らしいさにびっくり！そこで、三谷幸喜監督の名前を覚えなかったのは失礼だが、陪審員11号の役を演じた「弁護士なんだよ、俺は」とハツリをかましなが陪審員の「評議」に大きな役割を果たす豊川悦司の名前はしっかり頭に刻み込んだ。それに続く、『ラチオの時間』（97年）、『みんなのいえ』（01年）、『亀馬の妻とその夫と愛人』（02年）は、話題になっていることは知りながら、忙しさにかまけて観ていなかったが、映画評論家活動を本格的に開始した後は、『笑の大学』（04年）（『シネマルーム6』249頁参照）、『THE 有頂天ホテル』（05年）（『シネマルーム9』288頁参照）、『ザ・マジックアワー』（08年）（『シネマルーム20』342頁参照）、『ステキな金縛り』（11年）（『シネマルーム27』191頁）と続く、三谷映画を全て観ている。そして、その星の数はすべて星5つ。さらに、今回の『清須会議』も星5つだから、私の採点では最近の三谷映画は「オール5」ということになる。

もっとも、『清須会議』といっても、今どきの若い人は何のことが全然知らないと思うので、興行収入は少し心配だ。また、三谷映画の一つの良さは、映画が舞台かよくわからない「密室性」だが、それは本作も同じ。つまり、東宝スタジオ内に作った、清須会議が開催される大広間と、清須会議に出席する人物たちの居室が本作の舞台だが、権謀術策がうごめく清須会議の全貌を描くのに、これくらいの距離感が適切だったかどうかは私には少し疑問。したがって、そんな「マイナス」を差し引いた本意を言うと、実質的な本作の星の数は4.5・・・？

＜清須会議の目的は？その目的の達成は？＞

戦後68年を経て、「民主主義の権化」ともいえる国になってしまった日本は、多分世界で一番会議が多く、かつそれが長い国。一定の意思決定のために集団での会議は不可欠だが、それを有効に機能させるためには1人1人が具体的にはっきり意見を述べる必要がある。しかし、そんな充実した会議は、一体どれくらいされているの？そんな状況下で三谷監督が目指した「清須会議」は、「会議の席上で歴史が動いた」といわれるものだが、さてその意味は？

「本能寺の変」から25年後に尾張の清洲で開かれた清須会議の出席者は柴田勝家、羽柴秀吉、丹羽長秀、池田恒興の4人だが、清須会議の目的の第一は、天正10年（1582年）の「本能寺の変」で織田信長を失った後の後継者を定めること。そして第二は、明智光秀の領地の再配分を決めることだ。したがって、第二の議題には多少時間がかかっても仕方ないが、第一の議題は早く決定しなければ混乱が広がることは明らかだ。そこで、本来この清須会議に参加すべき宿老・滝川一益（阿南健治）の参加が遅れているにもかかわらず、その到着を待たないとして清須会議は開催された。そして、実質4日間の討議で後継者を決定するとともに、その後の歴史の方向は秀吉の思惑どおりに定まった。それが、「会議の席上で歴史が動いた」と言われる所以だ。

＜「ウィーン会議」と比較してみると・・・＞

他方、歴史を動かした会議として最も有名なものは、1931年のドイツ映画の名作『會議は踊る』で描かれたウィーン会議の目的は、ナポレオン失脚後のヨーロッパの秩序の再建と領土分割を決めること。そこでは、1792年より以前の状態に戻す「正統主義」を原則としたが、会議は各国の利害が衝突して数か月を過ぎて遅々として進捗せず、「會議は踊る、されど進まず」と評されることに・・・。ウィーン会議の間、オーストリア帝国、ロシア帝国、プロイセン王国、イギリス連合王国、フランス王国など、ヨーロッパ列国の代表は、権謀術策の限りを尽くしながら世紀の饗宴外交を展開し、王侯貴族たちは恋愛遊戯に明け暮れたらしい。

映画の中で「これは天国 ウィーンの一晩・・・ここはこの世にあらず まさに天上の楽園」と語る、ロシア皇帝アレクサンドル1世（ヴィリ・フリッチュ）とウィーンの町娘クリステル（リリアン・ハーヴェイ）との恋愛模様はたしかに楽しいが、おおいおい、そんなことにうつつを抜かしている時なの！現実にも、「會議」が始まってから半年後の1815年3月には、失脚したはずのナポレオンがエルバ島から脱出したとの情報も・・・。そんな危機感の中でやっと各国の妥協が成立し、6月9日に「ウィーン議定書」が締結され、「ウィーン体制」が確立したわけだが、會議で結論を出すまでに一体何日かかっているの？

このように、ウィーン会議の長さは、わずか4日間の會議で結論を出した清須會議に比べると異常だ。もっとも、いかに内向きな清須會議に比べると、ウィーン會議はナポレオンという共通の敵がいただけに、外向き・・・？

＜諸悪の根源は筆頭家老の無能さ！その役を誰が？＞

今や役所広司は、渡辺謙と並んで日本を代表する俳優。そんな彼が、『THE 有頂天ホテル』以来7年ぶりに三谷映画の主人公として登場するが、彼が演ずるのは織田家の筆頭家老でありながら、何とも無能な男、柴田勝家だ。彼はたしかに、戦いに次ぐ戦いを続けている時代には、戦闘において頼りになる武将だったが、鎧兜を脱ぎ刀を持たない會議の席における知能戦では、・・・？策士の丹羽長秀は、柴田のバカさ加減をわかったうえで、その筆頭家老という役職にもとづく求心力を活を求めようとしたが、その戦略の是非は？

今や日本を代表する名優となった、役所広司にしてみれば、自分がこんなバカ家老役を演ずるのは本当は嫌かもしれない。本心を言えば、『金融腐蝕列島・呪縛』（99年）におけるエリート銀行員・北野浩や、『突入せよ！あさま山荘事件』（02年）（『シネマルーム2』204頁参照）における名指揮官・佐々淳行、さらに『聯合艦隊司令長官 山本五十六』（11年）（『シネマルーム28』91頁参照）における山本五十六のようなカッコいい役をやりたいだろうが、たまにはこんな無能な男の役をやって、恩を売っておくことも必要・・・？それにしても、丹羽長秀と組んで、彼の作戦どおりに動いている間の柴田勝家はまさしく、いい年をして、お市の方（鈴木京香）へのソツコンぶりが後継者指名をめぐる知能戦より優先するようになってくる・・・。やっぱり、こんな男は・・・。そう考えると、清須會議の結論は正しかったのかも・・・？

＜秀吉役は誰が？あとの2人は誰が？＞

柴田勝家がいつも「サル、サル」とバカにし、草履取りの時代から知っていたのだが、百姓あがりの羽柴秀吉だが、本作で秀吉を演ずるのは意外にも大泉洋。私が「意外にも」と書いたのは、柴田勝家の向こうを張って、というより、結果的にはグーの音も出ないほど柴田勝家をやりこめ、清須會議を仕切ってしまう秀吉役の俳優は、少なくともギャラの上では役所広司と同列の俳優でなければダメだろうと思ったから。重量級の役所広司に比べると、大泉洋はいかに軽量級（必ずしも体重のことではない）だ。さらに、大泉洋は近時『探偵はBARにいる』シリーズで大ブレイクしその演技力が評価されているものの、織田四天王随一の策士である丹羽長秀を演ずる小日向文世や、滝川一益が遅延したためその代わりに會議に出席することになった、日和主義者の典型ともいえる池田恒興を演ずる佐藤浩市に比べると、その演技力はまだまだ・・・。大泉洋ファンには失礼ながら私はそう思っていたが、意外や意外、秀吉役の大泉洋は柴田勝家役の役所広司をコテンパンにやっつけるばかりで、丹羽長秀役の小日向文世に対しても、池田恒興役の佐藤浩市に対しても、堂々たる演技ぶり（仕切りぶり？）だ。

三谷監督が「今作はコメディではなく人間喜劇」と言明しているとおり、本作ではこれらの4人の芸達者が重量級は重量級なりに、軽量級は軽量級なりに、また、知恵者は知恵者なりに、バカはバカなりに、それぞれの人間の持ち味を見事に打ち出している。

＜これは、會議という名の戦（いくさ）である！＞

織田信長（篠井英介）が「本能寺の変」で明智光秀（浅野和之）によって殺されたのと同時に、二条城にいた嫡男・織田信忠（中村勘九郎）も死亡していた。そのため当初は、織田家の跡目相続人の候補者は、柴田と丹羽が推す、三男・織田信孝（坂東巳之助）と、秀吉が推す、二男・織田信雄（妻夫木聡）の2人とされた。しかし本作で見ると、信孝は織田家を引っ張っていく器量がないことは明らかだ。したがって、丹羽は信孝は名目だけの後継者で、実質は筆頭家老たる柴田の求心力に期待していたが、柴田がお市の方のご機嫌取りに忙しくなると・・・。他方、軍師の黒田官兵衛（寺島進）とも相談した上で、秀吉は柴田に対抗するべく名目だけのトップとして信雄を推したが、これは相当の（というより、どうしようもない）バカ。したがってそのバカさ加減が次々に露呈されてくると、秀吉もい加減うんざり。

これらの三谷幸喜流解釈がどこまで史実を踏まえたものかはわからないが、このように図式化してくれば、現在大ヒット中のTVドラマ『半沢直樹』における銀行内の権力闘争よりよほど単純だから、今どきの幼稚な大学生でも十分理解可能だ。『半沢直樹』最大のキャッチフレーズは、「やられたら、やり返す。倍返しだ！」だが、本作最大のキャッチフレーズは、「これは、會議という名の戦である。」というもの。私は弁護士として法廷での口頭弁論のやり取りや証人尋問はまさに戦（いくさ）だと認識しているが、三谷監督が描く清須會議での戦（いくさ）ぶりは興味深い。もっとも、滝川一益の到着を待つため、丹羽が企画・実現した紅白に分かれての「旗取りゲーム」のバカバカしさは、如何なもの・・・？

＜戦は男だけ？いやいや女だって！その1 お市の方＞

信長の妹・お市の方（鈴木京香）が絶世の美女だったことは有名。また、お市が嫁いだ近江国の浅井長政も相当ハンサムだったらしいから、その間に生まれたお茶々（後の淀殿）、お初（後の常高院）、お江（後の崇源院）もそれぞれ美人だったことは、2011年のNHK大河ドラマ『江～姫たちの戦国～』を見ればよくわかる。私は、「浅井三姉妹」の物語は、昔NHKラジオで森繁久弥と加藤道子の語りやっていた『日曜名作座』を小学生の頃に聴いてよく知っていたが、本作は、この浅井三姉妹が歴史の舞台に登場するより少し前のお話。つまり、柴田も秀吉もお市の方にソツコンだったが、小谷城が落城し、浅井長政が切腹した時に、主君命令によって秀吉が長男の万福丸を殺害したこともあって、お市は徹底的に秀吉を嫌っていた。三谷監督はそんな状況下でのお市をめぐる柴田と秀吉のモーションのかけ方を面白く描くとともに、この2人のバカな男を冷静にコントロールする女、お市のスタンスを見事に描き出していく。

清須會議の戦（いくさ）に「敗北」した後、お市は色仕掛けで（？）柴田に秀吉の暗殺を示唆し、柴田は忍びの枝毛（天海祐希）にそれを実行させるが、さてその首尾は？さらに、それに失敗したことを知るや、お市は柴田との結婚を決意し、一緒に北陸の北の庄に出かけることになるが、お市はなぜそんな決断を？もちろん、柴田が好きでそうしたのなら外からとやかく言うことはないが、女ゴコロとりわけ、信長という日本一の権力者の妹で、かつ絶世の美女の女ゴコロともなると、そりゃ奇々怪々・・・？

＜戦は男だけ？いやいや女だって！その2 松姫＞

本作後半から信長の跡継ぎとして急速浮上してくるのが、信忠の一人息子、つまり信長の孫で3歳になったばかりの三法師（津島美羽）だ。信雄のあまりのバカさ加減にうんざりしていた秀吉は、信長の弟である織田三十郎信包（伊勢谷友介）を口説こうとワイロ攻勢（？）をかけたが、すでに世捨て人になっていた三十郎信包には全くその気はなし。そんな秀吉がある日偶然河原で目にしたのが、妻の寧（中谷美紀）と一緒に遊んでいた信忠の妻・松姫（剛力彩芽）と彼女が連れていた幼い三法師だ。秀吉は「あの性格」だから小さい子供に好かれていたのは当然だが、寧から「この子は誰かによく似ているでしょ」と言われると、黒田官兵衛とともに、「これは！」とある確信を！そこから、それまでは信孝がいい、いや信雄がいいと言い争っていた清須會議の第二幕が開くことになる。

私が本作ではじめて知ったのは、この信忠の妻・松姫は武田信玄の孫娘だったということ。本作冒頭、信長に続いて信忠が明智軍の攻撃の前に死んでいくシーンが紙芝居のように映し出されるが、そこで信忠から「生きよ！」と命じられた松姫は、さすが武田信玄の孫娘だけに、かなりの戦術家。見かけは可愛いですが、頭の中ではさまざまな策謀をめぐらしていたらしい。すると、秀吉の妻・寧と一緒に我が子連れて河原に遊びに行ったのも、ひょっとして何かの計算づく・・・？

＜會議は運営が難しい！司会者は誰が？＞

私は東京の顧問会社でも一度開催される取締役会に出席するとともに、年に一度開催される株主総会にも出席している。日本に多いシャンシャン會議はともかく、賛否が対立する総会では、議事運営の権限を誰が握るかが大きなポイントになる。会社では普通、代表取締役（社長）が議長を務めるが、さて清須會議の議長は？清須會議のそれは前田玄以（でんでん）だが、彼らは議事進行の権限を持った「議長」というより、ただの司会進行役のようだ。現実にも、後継者を選ぶ會議に、その候補者本人である信孝と信雄が同席しているの腹を割った議論ができないという動議（？）を秀吉が提出し、丹羽がそれに同意すると、司会進行役の前田は率直にそれに従ったから、これなら清須會議を議長が独断的に仕切ることにはなさそう。ちなみに、中国共産党のトップたる政治局・常務委員は、現在習近平を中心とする「トップ7」と言われる7名だが、その前の胡錦濤時代の時は9名。このように常務委員の数を偶数ではなく奇数にしているのは、賛否回数となって意思決定できなくなるのを避けるためだ。

そう考えると、織田家の後継者を決める清須會議の出席者が4人というのは、そもそも最初から議決できない危険をはらんでいたことになる。最初にその点を議論していないのは、民主主義が十分発達していないためだが、ひょっとして2対2で賛否が分かれた場合に、司会者の意見で決定することがありうるの？本作における前田玄以の言動をみれば恐ろしいのはなさそうだが、日本ではつい最近まで、「衆議のねじれ」現象のため国会で何も決められないという困った事態が続いていた。ひょっとして、清須會議でもそれと同じような危険が・・・？もっとも、三谷監督が描くストーリー展開にそんなくだらない弁護士的心配は無用だから、ご安心を。しかし、4人の議決権者が出席した會議できちんと議決するためには3対1にならないといけないが、秀吉が突如「第三の候補者」たる三法師を推したとしても、今の状況を見ている限り、3対1という議決はありえないのでは・・・？さあ、そんなにならざるもさつちも行かない状況下で秀吉が見せる、何とも大胆不敵な策略とは？

＜両者ははざま、前田利家はいかなるスタンスを？＞

秀吉が信長に草履取りとして仕えた時から、秀吉の兄貴分かつ親友として付き合ってきたのが前田利家（浅野忠信）。秀吉がトントン拍子に出世していったのは周知のとおりだが、それを快く思わなかった武将たちが織田家の中にたくさんいたのは仕方ない。その筆頭が柴田勝家だが、前田利家は今の副官になっていたから、清須會議での両者の衝突を見守る彼の立場は微妙だ。逆臣・明智光秀を電光石火の「中国返し」で打ち取ったのは秀吉だから、信長亡き後、秀吉の求心力が働くことになったのは当然。利家はそのことを十分認めていたが、もし、秀吉が凶に乗って織田家の乗っ取りを狙うようなことになればそれは絶対許せない。ところが、家来たちが入っている共同部屋の中から、清須會議での秀吉のさまざまな言動を見ると、どうもその傾向が・・・。今なお秀吉の「無二の親友」と自負している利家はあるときそんな疑念を直接秀吉にぶつけてみたが、それに対する秀吉の回答は「そんなことはありえない！」というあっけらかんとしたもの。それなら、安心。このまま清須會議の推移と、織田家の後継者が誰になるかを静かに見守れば良いと利家は考えたが、さて秀吉の本心は？

柴田勝家は、成り上がり者が偉そうな口をきき、リーダー的立場にのし上がってくるのが気に入らないだけの単純な反秀吉派の筆頭。しかし、丹羽長秀は知恵者で論理的思考ができるだけに、「秀吉の言うことに一理あり」と判断すれば、少しずつその方向に。また、池田恒興は、かつて「風見鶏」と言われた元中曾根康弘総理と同じようなタイプ（？）だから、清須會議での風向きが少しずつ秀吉寄りに吹き始めたうえで、後継者として最も正統性ありと考えられる三法師が、秀吉びいきであることがわかると・・・。他方、秀吉の狙いは「織田家乗っ取りの企み」だと女の勘で判断し、全く疑問を持たなかったのがお市の方だが、彼女の弱点は、彼女が頼りとする柴田勝家が會議という戦（いくさ）ではからきし無能だったこと。こうなれば、清須會議の行方は明らかだが、會議でのそんな結論は前田利家との「約束」を反故にすることになるかも？もしそうなら、あの時2人で約束したように、利家は秀吉の首をはねなければならぬが、そんな駆け引き無用の真剣勝負の場での利家に対する秀吉の議論の立て方は・・・？

どこまでも戦い、一方が減んでいく宿命にあった秀吉と柴田勝家の戦いは男の悲哀に満ちているが、互いに親友として信頼しあった男同士の、本心をぶちまけた戦いも大いに見ものだ。結果的に、前田利家は秀吉が死ぬまで親友としての立場を守ったが、柴田勝家と秀吉のはざま、彼は秀吉に対していかなるスタンスを？

2013（平成25）年9月2日記